

往生

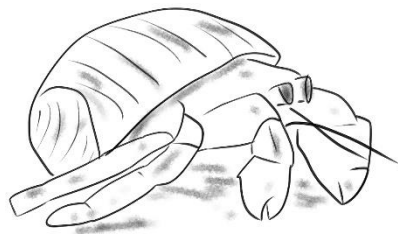
「ちっちゃきちー往生
しまっせー」
「あの人が往生した」



前者「往生」の使い方は物事が行き詰まるという意味です。後者は誰かが亡くなったという意味で用いられます。

しかし、漢字のどこもみてもそのような意味を読み取ることが出来ません。往生とは「往き生まれる」と書きます。生まれるのになぜ死することを往生というのでしょうか。元々の意味とはどうやら違うようです。

元来、往生とはこの世の命が終わって、他の世界に往き生まれ変われることを意味していました。輪廻という思想の土壌に生まれた言葉です。ここから、浄土思想（阿弥陀如来の極楽浄土に生まれ行く）の発展を経て、往生が極楽往生の意を指すことが基準となったのです。



この世は仮の宿に住んでいるようなもの。時々、突然出て行ってくれと言われることもあります。その時に還る家があるのかどうか。極楽往生は、人生の還るべき道を指示しています。

生者必滅
会者定離
いかに別れると
知てはいるがこゝ
がーバレ丸ノ

こんなところに 仏教用語

身近な仏教用語を紹介しています。

往来

人の往来がある…というと、人々が町を行き交う姿が想像されます。仏教ではどのように用いるのかといいます

と、お釈迦様がこの世にお生まれになり、人々を教化されたことを「往来」といいます。あるお教の中では、お釈迦様は八千回、様々な場所を行き交いし、人々を教化して回られたとあります。三十五歳から八十歳までの間、インドの雨期の間を除いてと考えると、ほとんど毎日晩年まで伝道の旅をしておられたのだと思います。二五〇〇年前のインドでと考えるとどれだけの苦勞であったか…。

ここで大事になるのが、何故お釈迦様がこの世にお出ましになられたのか、ということですが。答えは普段お勤めする正信偈の中にありました。

如来所以興出世 唯説弥陀本願海（「釈迦」如来、世に興出したまうゆえは、ただ弥陀本願海を説かんとなり）



お釈迦様がこの世にお出ましになられたわけは、阿弥陀如来の本願を説くためであったと、親鸞聖人は大無量寿経の言葉を引用されました。